

# 国語科 提案授業実践報告

1. 学年と単元・題材 2年「『形』の魅力を熱く語れ！」 教材名：菊池寛『形』

## 2. 単元・題材について

菊池寛の小説『形』は、見開きで収まるような短い作品でありながら、緊迫感のある合戦場面と細やかな人物描写、そして衝撃的な結末で締めくくられる作品である。本単元では『形』とその原典とされる『常山紀談』（江戸時代の儒学者、湯浅常山による著作）所収「松山新介の勇将中村新兵衛が事」（以下、本報告では「原典」と記す。）を読み比べ、二つの作品の相違点を見出し、作品の構成や表現の特徴に注目することで、『形』という作品の魅力はどのようなところにあるのかを考えさせたい。また、この作品のような、優れた近代文学作品を読むことで、今まで出会ったことのない作家や作品と出会い、生徒自身が読書の幅を広げる契機としたい。

本単元の指導の工夫として、次の三点を挙げる。

- ・『形』と原典とを読み比べ、二つの作品の相違点を見出し、『形』の文章構成や表現の効果に気づかせる。
- ・二つの作品の相違点を学習班（3人または4人からなる班）で共有し、話し合うことで『形』の魅力について考え、一枚のスライドを作成し、クラスで発表する。
- ・作品タイトルである「形」とは何か、まず初読の時点で考え、学習のまとめとして再度「形」とは何かについて考えることで、作者の意図や目的に迫る。

上記の活動から、作品への個人の読みを深め、話し合いを通じて生徒同士の考えを伝え合い、そこからさらに自らの読みを深めていく様子を、ノートの記述や話し合いの様子、またMoodleで提出させたまとめから見ていくこととする。

## 3. 単元の目標／評価規準

### (1) 本単元の目標

- ①現代語訳や語注などを手掛かりに作品を読むことを通して、作品に表れたものの見方や考え方を知ることができる。 [知識及び技能] 2年(3)イ
- ②観点を明確にして文章を比較するなどし、文章の構成や論理の展開、表現の効果について考えることができる。 [思考力・判断力・表現力等] 2年C(1)エ
- ③言葉がもつ価値を認識するとともに、読書を生活に役立て、我が国の言語文化を大切にして、思いや考えを伝え合うことができる。 [学びに向かう力、人間性等]

### (2) 本単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
・語注や現代語訳、国語辞典などを手掛かりに『形』とその原典を読むことを通して、作品に表れたものの見方や考え方を知る。(3)イ	・『形』とその原典とを読み、二つの作品の相違点を見出し、『形』の文章構成や表現の効果について考えている。(C)エ	・『形』の魅力について互いの考えを伝え合い、そこからさらに自らの読みを深めようとしている。

4. 指導と評価の計画（単元・題材） ★印は振り返りに関する活動

時間	ねらい・学習活動	指導上の留意点と評価
1	①『形』を通読し、「形」とは何かを考える。 ②本文を読解する。 ○語句調べをしながら、内容を理解する。	○辞書に載っていない語句は授業者が補足する。 [評価] 本文の内容を理解し、形とは何かを考えている。 [思・判・表]
2 本時	①『形』の原典を読み、内容を理解する。 ②二つの作品を読み比べ、共通点を確認する。 ③二つの作品の相違点を見出す。 ④★相違点について学習班で共有する。	○『形』と原典とを読み比べ、二つの作品の共通点を確認し、相違点を見出す。 [評価] 『形』と原典とを読み比べ、二つの作品の相違点を見出している。 [思・判・表]
3	①二つの作品の相違点をもとに、『形』の構成や表現にはどのような特徴があるかを、学習班で話し合う。 ②『形』を魅力的な小説に変えたのはどの部分であるかを話し合い、スライドを作成する。	○構成や表現の特徴から、『形』作品を魅力的な小説に変えたのはどの部分であるかを学習班で話し合い、スライドを作成する。 [評価] 展開や表現の効果について根拠を明確にして考えている。 [思・判・表]
4	①学習班ごとに『形』の魅力を発表する。 ②★「形」とは何かを再度考える。	○各班2分で発表を行う。 [評価] 形とは何か、自分の考えを深めている。 [態度]

5. 本時の学習

(1) 本時（第2時）の目標

目標：『形』と原典とを読み比べ、それぞれの文章構成や表現に着目して、二つの作品の相違点を見出すことができる。

(2) 指導と評価の流れ

	主な学習活動と内容	指導上の工夫・配慮，評価（◆）
課題設定	◎原典を読み、内容を理解する。 →授業者の範読や語句の説明を聴きながら内容をつかむ。 →必要に応じてワークシートにメモを書き込む。 ◎『形』と原典とを読み比べ、二つの作品の共通点をクラス全体で共有する。 →共通点に色ペンで線を引いていく。	・原典に一部現代語訳を付したワークシートを配付する。 ・分かりにくい語句などは授業者が口頭で補足する。 ・共通点は授業者が生徒に問いかける形で全体共有していく。
課題追究	◎二つの作品の相違点を見つける。 →共通点で引いた線と違う色ペンで線を引いていく。 →線を引いた部分は違うのか、簡単にメモしておく。 ◎二つの作品の相違点を学習班で共有する。 →付箋には気づいた相違点を簡潔に記す。 →進行役を決め、学習班で話し合っていく。 →「どこが」違うのかだけでなく、「どのよ	・まずは個人で相違点を見つけていく。 ・相違点は教科書本文ではなく、ワークシートに記入するよう指示する。 ・授業者が本日の進行役を指示する。 ・ホワイトボードの原典本文(ワークシートを拡大したもの)にどんどん付箋を貼っていき、学習班内で共有していく。 ◆『形』とその原典を読み比べ、それぞれの文章構成や表現に着目して相違点を見出し

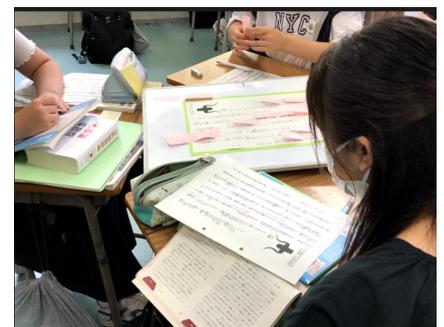
	うに」違うのかも共有していく。	ている。 [思・判・表]
省察	<p>◎本時のふり返しを行う。 →「二つの作品を比べて考えたこと・感じたことは何か」</p> <p>◎次時について説明を聞く。 →『形』の魅力について考えていく。 →授業開始前に学習班の形にしておき、班で1台chromebookを用意しておく。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習班で共有するために用いたワークシートを回収する。</li> <li>・本時のふり返しはノートに記入させる。</li> </ul>

### (3) 評価規準

『形』とその原典とを読み比べ、それぞれの文章構成や表現に着目して、二つの作品の相違点を見出している。 [思考・判断・表現] (C)エ

### 6. 生徒の学習の実際

第二時では、自分の気づきや考えを簡潔に記した付箋をホワイトボードの原典本文(ワークシートを拡大したもの)の該当箇所に貼り、学習班で共有した。まだ付箋が貼られていない箇所にも相違点はないか、既に付箋が貼られている場合は、自分の考えと同じかどうかを生徒たちは確認していた。本時のまとめ「二つの作品を比べて考えたこと・感じたことは何か」について、生徒の記述の一部を挙げる。



相違点を付箋に書き出す様子

- ・『常山紀談』では話が簡潔で、以前学習した、鳩と蟻の古文の話(筆者注：1年時に学習した『伊曾保物語』所収「鳩と蟻のこと」)のように教訓がはっきり書かれているところが似ていると感じた。一方、『形』は物語性が強く、例えば新兵衛が戦没したのかをはっきり書いていないところもあった。
- ・『形』では中村新兵衛のことを「新兵衛」と書いているのに対し、『常山紀談』では「中村」と呼び捨てにして呼んでいるので、『形』の方が親近感を感じました。また、『常山紀談』では新兵衛の心情が書かれておらず、文章が淡々としているのに比べ、『形』では細かい描写が多いので気持ちの変化が読み取りやすいと感じました。

第三時では、〈『形』を魅力的な小説に変えたのはどの部分か〉というテーマで、スライド・発表原稿を学習班で作成し、次時に発表することを生徒に伝えた。『形』を魅力的にしている箇所を、本文から複数探すのではなく、一文または単語レベルにポイントを絞って挙げさせ、「その部分があることで【こう読めるようになった】【こんな効果をあげている】【こんな小説になった】を熱く語る」発表にするよう伝えた。ポイントを絞って考えさせたのは、『形』が極めて短い作品であることと、焦点化することでより深い読みを引き出すためである。各班発表時間は2分間。全員が発表者となり、スライドは一枚だけ作成し、発表内容は班全員でよく検討するよう指示した。

学習班は各クラス7班ずつ、学年全体で28班あるが、第四時の発表では第一段落(冒頭～若武者との会話)から12班、第二段落(若武者が活躍する場面)からは5班、第三段落(新兵衛の後悔)からは7班、題名『形』は4班が、それぞれ魅力を生み出した箇所として指摘した。

第四時の発表後、単元のまとめとして、再度「形とは何か」を生徒一人ひとりが考え、ノートに書いていった。授業の最後にはMoodleに最終課題を載せてあるので取り組むように指示した。最終課題

は【①『形』を書いた菊池寛の意図 ②『形』のここがすごい！】①②いずれかについて、自分の考えを200字以内で入力するものである。以下は、Moodleで提出させた最終課題への生徒の記述である。

### ①『形』を書いた菊池寛の意図

- ・菊池寛が『形』を書いた目的は、彼が『常山紀談』から学んだ、立派で素晴らしい「形」を持っていても、中身の力が伴っていないと本当に強いとは言えないこと。また、それだけで満足してはいけないということ。つまり「人の見掛けはその人の内面を表していない」、また「今の状態で満足しない」という教訓を、生きていく上で大切だと思い、物語として記すことで後世に残し、多くの人に知ってもらうためだと考えます。
- ・菊池寛さんは『常山紀談』に感動、共感しなければ『形』を書かないと思います。菊池さんは二つの文章に共通する、表面的な「形」だけに頼ってはいけない事に共感し、それを人々に伝えようとした、と思いました。しかし二つの文章で異なる部分、教訓を書かずに読み手に考えさせること、主人公の感情の起伏を激しくして臨場感を加えることを改善しようとして『形』を書いたのだと思います。
- ・私は『常山紀談』と『形』を読み比べて、菊池寛は原作より新兵衛の力を下げているように感じた。原作では主題を明記しているが、『形』では書いていない。私はそこに筆者の意図を感じた。『常山紀談』と『形』はよく似た作品だが、主題は違うのだ。私の思う『形』の主題は「強さに自惚れると自分の行動を後悔し、失敗する」つまり「油断大敵」である。菊池寛が『形』を書いた目的はこの主題を読者に伝えるためだったのだと思う。

### ②『形』のここがすごい！

- ・菊池寛が作った『形』の魅力は中村新兵衛が若武者に猩猩緋の服折と唐冠纓金の兜を貸すということを付け足したことだ。『常山紀談』では何故かしたのが詳しく書かれておらず、なぜ新兵衛が自分の形をすんなり貸してしまったのかが、モヤモヤが残っていた。しかし『形』では誰もが納得するような形でまとめられて分かりやすくなっている。この要素を足すことで、若武者が討死した新兵衛を見て何を思うのかなどを考えることができる。
- ・『形』のここがすごいかを考えたときに思いついたのは、若い士の存在だった。勿論短い文章で新兵衛の人となりを読み手に伝えられるのもすごいと思う。しかし、私は若い士の活躍を描くことで、形を失った新兵衛との対比を明確にすることや、実体のない「形」がどれほどの力を発揮するのかという点が読み手に伝わりやすくなっているのではないかと思った。
- ・『形』の魅力は題名の使い方だ。形が何なのかこの話の結末まで読まないとわからない。読み手は物語を読み、もう一度題名を見ることで、やっと形、そして物語の意味を理解することができる。つまり、菊池寛は『常山紀談』にあったまとめの部分をなくしたのではなく、漢字一文字の題名に込めているのだ。このように、形は重要な人名や地名ではないが、形があることで物語がより魅力的になっている。

## 7. 生徒の学習の考察

『形』の魅力的な小説に変えた箇所として学習班が挙げた内容は【1 若武者が登場し、新兵衛と会話する場面】【2 題名『形』】【3 新兵衛の「後悔」】の三つに分けることができる。

【1 若武者が登場し、新兵衛と会話する場面】について、「新兵衛が猩猩緋と唐冠纓金を貸した人物が『常山紀談』

のように「ある人」ではなく、新兵衛と親子のような関係にある人物に設定し、かつその若い士との

【C班】

**「彼の脾腹を買っていた」** (p.275 20行目)

- ⇒常山紀談での「戦没す」とは違うインパクト  
スピード感・リアル感・読み手に結末を想像させる
- ⇒結末が事実で終わっている。  
インパクト・文章の主題を読み手に想像させる

生徒が作成したスライド

会話文を入れることで、新兵衛に人間味が増す」とした班があった。また別の班は「若武者の活躍を自分のことのように喜ぶなど、新兵衛に心情が生まれ、クライマックスの後悔の気持ちを強調することにつながる」と指摘した。

【2 題名『形』】については「「松山新介の勇将中村新兵衛が事」という題名からは何が言いたいかわからない。作品の題名が一番伝えたいことを表す部分であるから、『形』という題名にしたことで読み手に形とは何かを考えさせる効果がある」と述べた班があった。別の班は「題名が一番最初に読み手に与えるインパクトであり、それが漢字一文字であればインパクトは更に強い」と指摘した。

【3 新兵衛の「後悔」】については、「新兵衛が後悔することにより、貸してしまった猩々緋と唐冠纓金の存在の大きさ、題名でもある『形』の大切さがより伝わる」と述べた班があった。別の班は「『常山紀談』では読み取ってほしいことが最後に明記されているが、『形』ではどうして後悔したか、どうしていれば後悔しなかったか、新兵衛の傲慢だった気持ちを読み手に考えさせている。」と指摘した。二つの作品を比較して読むことで、菊池寛が『形』を作る際に工夫した点、それによって生まれた魅力に生徒は迫っていくことができたと言える。

## 8. 成果と課題

『形』と原典とを比較して読み、相違点を見つける活動では、人物設定や教訓の有無、結末の違いなど様々な気づきが生まれた。その結果、生徒たちは『形』という作品そのものをより深く読み込むことになった。さらに、なぜそのように作品を書き換えたのか、作者の意図や工夫などを考えることは作品の魅力を考えていくことになる。そしてこの読み比べは話し合い活動や発表を通じて「個人⇄学習班⇄クラス全体」の行き来につながり、気づきを仲間と共有していくことにつながっていく。

「形とは何か」という問いに対して、生徒の初読後と発表後(学習終了時)との記述を紹介する。

- ・〈初読後〉実際には中身が変わらなくても、自分の心持ちを変えるもの。  
〈発表後〉普段は自分の飾りのように思うことが多いが、実際には自分の身体の一部だと思われている部分だと思う。これは、主に他人から見たときに変わる部分で、本人が変わっていなくても、他の人の接し方で本人も段々と変わるところが「形」の扱いの難しさだと思った。
- ・〈初読後〉権力のこと。  
〈発表後〉「見た目上での権力」ではないかと思いました。この文章を初めて読んだときはただの「権力」なのかなと思っていました。しかし、様々な他の班の発表を聞いていく中で、「見た目上」という言葉を付け足すべきではないかと考えました。新兵衛は服折とかぶとを気軽に貸したことによって、自分の服折とかぶとを失ったことになります。失ったことで敵は新兵衛が「槍中村」であることが分かりません。だから恐れずに戦うわけです。それで新兵衛は殺されてしまいます。これは相手も新兵衛も急に強くなったわけではなく、新兵衛の「見た目」が変わっただけです。猩々緋と唐冠を着ているから、さも権力があるように見せていただけです。新兵衛自身「大きな誇り」を感じていたわけです。このように、実際にないけれどもある「見た目」だけで新兵衛は自己満足している部分がこの作品にはたくさんあります。「いつもと勝手が違っている」の部分で新兵衛は自分の実力に気がついたと思われます。このような理由から、形とは「見た目上での権力」ではないかと考えました。
- ・〈初読後〉輝かしい猩々緋の服折と唐冠。この二つに力がある。中村新兵衛はこの二つに救われていた。  
〈発表後〉地位が高くなったり強くなったりするための道具だと思う。「形」では新兵衛が猩々緋とかぶと

を側腹の子に貸してしまうことにより、今までどれだけ猩々緋とかぶとに救われてきたか実感している。例えばある人がクラスがの「リーダー」という名前をもらうことによってリーダーとなる前よりもみんなの中心となることができると思う。しかし「リーダー」という名を取ると、不思議とまとまらないことがあるはずだ。このように、実力は凡人だったとしてもその人を強くしたり権力を持たせたりするものが「形」なのだと思う。

- ・〈初読後〉相手に先入観を与えるもの。「槍中村」＝猩々緋・唐冠纓金の武者＝強い。この話の中では、猩々緋の武者が唐冠のかぶとを被っている姿。戦場の華であり、敵に対する脅威であり、味方にとっては信頼的。

〈発表後〉「形」とは自分の積み重ねてきた実力、努力だと思う。最初は全て自らの実力で「形」の価値を高めていた。だが、その「形」の価値が上がるにつれて、周りが「形」におびえて本来持っている力を発揮できなくなり、新兵衛はそれに甘えて力を強めることができなくなった。「形」に対する安心感が強まり、戦場の華のような存在で「無敵」というレッテルが貼られていたため。この文章の最後の場面で、「形」のない新兵衛に向かってくる敵の様子がいつも以上に力を出し切っているように感じたのは「形」に対する甘え、安心感によるものだ。だから「形」とは、元々は自分で培っていった実力、努力のことだと思う。

話し合い活動では、輪番制で進行役を決め、スライド作りのためのChromebook使用時間を授業後半の20分間のみとした。そうすることでスライド作り(画面)に没頭して話し合いに参加しない生徒が出ず、スライドの見栄えに凝ろうとして班での話し合いが疎かになることを回避する効果があった。つまり、全ての班で『形』の魅力を熱く語れるような、充実した話し合い活動が行われたのである。

今回の実践の改善点としては、「形とは何か」を生徒に二度考えさせたことで、作品の最重要ワードを生徒に強く意識させてしまったことである。生徒から自然発生的に「形とは何か」という疑問が生まれることが望ましい。生徒が自発的に作品の題名であり、本文をつかむ鍵となる追究ができるような授業展開にできるようにしていきたい。また、本単元は四時間構成としたため、生徒個々の考えやMoodleに入力した文章を互いに交流する場を設けることができなかった。そのため二学期になってから国語科のClassroom上で、他のクラスの発表やMoodleへ記述を共有していくことになってしまった。次に本単元を扱う際には、生徒の意見交流の時間を確保しつつ、『形』という作品の魅力を一人でも多くの生徒が実感できるようにしていきたい。

## 9. 参考文献等

- ・岩波文庫『常山紀談』上巻・下巻 湯浅常山 岩波書店 1988年
- ・『戦国武将逸話集』湯浅常山(原著) 勉誠出版 2010年
- ・福井市立郷土歴史博物館ホームページ(情報取得日：2021年6月7日)

<http://www.history.museum.city.fukui.fukui.jp/>